

〈総合B〉

体験学習—環境と人間

濁川 孝志

まさか自分が担当しようとは

全カ리의総合教育科目の中に、総合B群と言うカテゴリーが設けられた。コンセプトは『いくつかの関連領域を統合し1つのテーマについて考察する総合講座』。教員もそれぞれ専門の違う複数の人間が関われる。時代のニーズにマッチした講座である。もともとこれに類する講座は旧一般教育課程の中で、『総合講座』として存在した。しかし総合B群では、講座数が7テーマ12コマ(1997年度)と拡大され、各講座で最大3コマまで非常勤の枠が使えることになった。画期的なことである。財政的な観点から経費節減の傾向が強い種々の問題を尻目に、通常の3倍もの経費を使うこの企画が承認されたのは、この種の講座の重要性を大学が充分認識していることの現われである。これから迎える21世紀には小・中学校においてさえも、複数領域を関連付けた『総合』という科目が新設される。つまり世の中は、一つの専門的なことだけを狭い範囲で追求する我々大学教員みたいな人間(?)ではなく、もっとそれらの知識を現実社会で活用

できる総合的な判断力を身につけた人材を求めているようである。立教大学の全カ리가目指す『専門性を身につけた教養人の育成』は、正にこの考えに適合したものと言えよう。

しかしまさか自分がこの講座を担当することになろうとは、夢にも思わなかった。僕に限って言えば、自分から積極的に“テーマを掲げた”というよりは、学部単位で割り当てられたので“何とかひねくり出した”というのが実状である。そしてできたのが、本講座『体験学習—環境と人間』。当初はもっとあか抜けないネーミングであったが、法学部の所教授が、『体験学習—環境と人間』と命名して下さり、名前が内容を凌駕するかつこうで、この講座はスタートした。

無名塾の俳優と超能力者を講師に迎え、講座はスタートした

環境問題は、テーマ設定としては実にタイムリーであったと思う。僕自身、登山、スキー、カヌーなど自然の中での活動が多く、日本の自然環境の退廃ぶりには強い憤りと関心を持っていたが、言うまでもなく“地球環境の間

題”は、現在、人類が抱えている解決すべき最重要課題の一つに違いない。新聞、雑誌、テレビなどのメディアでは、毎日のように環境問題に関する話題が取り上げられる。CO₂濃度上昇による酸性雨や地球温暖化の問題、オゾン層破壊による紫外線量増加の問題、気候にまで影響を与えかねない熱帯雨林の大規模な伐採と、それに伴う地球砂漠化の問題、更に自動車排気ガス等に含まれる窒素酸化物をはじめとする種々の有害物質の問題等々、数え上げれば枚挙に暇がない。国内に目を向ければ、かつてのような企業の営利主義と怠慢がもたらすあからさまな公害問題は減少したものの、長良川河口堰に代表される河川環境の問題、農地拡大か自然保護かで揺れた諫早湾の干拓問題、白神山地のブナ林保護で決着をみた青森秋田スーパー林道のような森林保全問題、自浄能力を超えた污水排出による海洋や湖沼汚染の問題等、我々の生活に直接影響を及ぼすような環境問題が山積している。そしてこれらの問題には、政治、経済、地元の利権などが複雑に影響し合っているため、単純に解決策を見出せないのが現状である。本講座は、これら我が国が抱えている環境問題の中でも、特に河川と、それをとりまく森林にスポットを当て、これらの問題に対する学生の問題意識の喚起を第一目標に、多彩な講師陣をお迎えし、合宿形式の体験学習というスタイルで開講された。

講師陣には、ユニークな方をお迎え

できた。まず、多田実氏。本講座のテキスト『四万十川歩いて下る』の著者。彼は大学卒業後、環境保護や市民NGO関連の活動に関わるが、その後、俳優を目指し仲代達也率いる『無名塾』に入塾。現在は俳優活動を停止し、フリーのルポライターとして活躍する変わりダネ。中でも大学在学中に、インド亜大陸をオートバイで1年間放浪した体験や、知床の原生林伐採をストップさせた『チプロ運動』の時、最後まで体を張って木にしがみつき、機動隊と戦った体験などは、学生を熱く感動させていた。もう一人の非常勤講師、大平満氏は、現職、ナキューサ東日本（カヌーアカデミー）代表取締役で、新潟県カヌークルーミング協会会長を務めるナチュラルリスト。そして超能力者。本講座魅力のサブタイトル『カヌーに乗って自然環境を見つめ直そう』の、カヌーの部分の多くは彼に負っているのだが、同時に自然環境問題に関する見識も深く、環境にローインパクトな生活を実践するその生き方に、学生たちも深く胸を打たれたようである。余談になるが彼は臨死体験の持ち主で、それ以降超能力が身に付いてしまい、透視や幽体離脱ができる。今回の合宿では、カヌーを前にどしゃ降りの河原で、“30分後に空は晴れる”と予言し、そのとうり奇麗に青空が望いてきた時には、学生共々圧倒されてしまった。

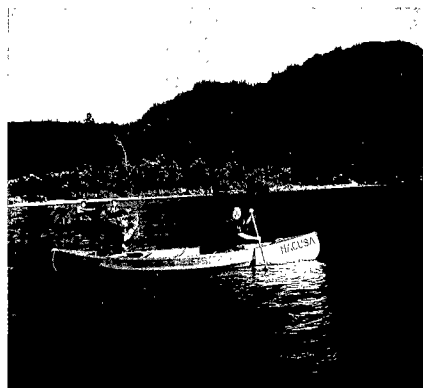
カヌーに乗らないと見えてこない世界

さて本講座の具体的内容であるが、授業は2回の学内での事前のガイダンスと4泊5日の合宿スタイルで、新潟県は谷川岳の麓にある土樽山荘をベースに行われた。基本コンセプトは、実際に自然を肌で感じ、その素晴らしさを味わうこと。そしてテキストで読んだ日本の河川や森林環境の実態を、自分の目で確かめること。総合B群は基本的に複数の領域を統合した総合講座である。このような総合講座が重要なのは、現実の生活場面ではひとつの専門領域だけの知識では、それが有効に機能しないケースが多いからだと思う。この講座に関して言えば、いくら机上で河川環境の勉強をしても、カヌーを操る技術が無ければ、実際に川に入って細かい状況を確認することはできない。陸からでは見えない現実が、水面に浮かぶと見えてくる。いくらきれいに見える川でも近くの山にゴルフ場を抱える場合は、除草剤などで水はかなり汚染されている。これは河原の石をはがして水棲昆虫（川虫）を調べれば解るのだが、ジンのように澄んだ水でも日本の川ではほとんど飲めない。またダム建設の是非を考える場合、ダムのもつ本来の機能や自然への影響だけでなく、それに関わる地域経済、その利権が生む土建業者と政・官の癒着などを視野に入れないと実態は見えてこない。本講座は『体験学習』であるが、

アウトドアでの生活は、どの場面を捉えても知識の統合が要求される体験学習であると思う。

さて具体的なプログラムであるが、合宿初日の昼間は、グループ単位でのオリエンテーリング。学生達は地図を頼りに目標マークを求め、林道をさ迷った。一班6名で構成されるグループは、学年も学部も違う初対面の者同士の集まりであるが、地図を片手に山道を右往左往するうちに、互いのコミュニケーションが図られ暗黙のリーダーも決まっていた。こちらの計算どおりである。初日の夜は、テキストとして指定した『四万十川歩いて下る』の感想発表会。初日でまだ合宿生活に慣れないこともあり、この会は“軽く流そう”などと考えたこちらの思惑は見事に裏切られ、のっけから議論は白熱し、深夜に及んだ。テレビ朝日『朝まで生テレビ』のノリである。もっとも“アクビ”を連発していた者も、かなりいたのだが。この時に出たユニークな意見は、『夏の消費電力がピークに達する時には、電気料金を通常の3倍にしてはどうか』というもの。そうすれば無駄な電力消費は押さえられ、電力確保を名目にしたダム建設も少しは抑制できる。更に『ここで得られた余剰の電気料金は、環境維持の為に使用する』というものである。そのまま実現するのは難しいだろうが、何かのヒントを与えてくれるアイデアだと思う。学生は合宿の前に数冊のテキストで日本の自然環境が抱える問題点について

勉強し、その感想や、具体的対策についてレポートとして提出した。従って、各自それなりの意見や問題意識は持っていたようである。しかし半数近くの学生は、環境問題よりも、むしろ副題の『カヌー』の魅力に引かれてこの授業を選択したらしく、正直に『指定された環境問題に関する何冊かの本を読んで、はじめて日本の自然環境の危機的状况や政府の無策ぶりを知った』とする学生がかなりいたのも事実である。2日目と3日目の昼間は、学生お目当てのカヌー。この授業で使用したカナディアンカヌーは安定性の優れた2人乗りタイプで、初心者でも数時間練習をすれば、なんとか川下りができるようになる。2日目の午前中3時間ほどかけて、クロッシング、ターンイン、ターンアウトなどの基本技術の練習をし、午後からはさっそく魚野川リバーツーリングに出かけた。総勢40名（20艇）を超える大船団である。カヌーに乗って川面に浮かぶと、水面から数十センチの所に目線がきて、普段見えない風景が見えてくる。普段は岸から川を眺めるが、カヌーでは川の中から回りを見ることになる。当然といえば当然であるが、そんなちょっとした目線の違いが新鮮な感動を与えてくれる。とある岩場の影にカヌーを止めてみると、景色が大パノラマになって、『ウワーッ、凄いなー』という学生達の声、声、声。水中には時々魚影が走り、パドリングせず音を発せずにカヌーを流すと、接近しても水鳥たちはまず逃げない。



カヌーでしか見えない世界が広がる

波立つ瀬では顔まで水飛沫を浴びるが、のんびりした瀬場では船の中で仰向けになって空を眺めても大丈夫。川の流れがゆっくりとカヌーを運んでくれる。正に、命が洗われるようなひとときである。もちろんひっくり返ってレスキューを受けたチームもあった。しかし夏の青空の下でするカヌーツーリングでは、沈（沈没することを、チンと言う）もまた楽しいのである。中には自ら積極的に（？）沈していく迷惑な艇もあったが。3日目の午前中は、朝からかなりの雨が降っていた。しかし、大平先生の予言（念力？）どうり、我々が川岸に付くと30分ほどで雨は上がり、夕暮れに上陸する頃には、一同夏の日差しで肌がすっかり焼けてしまっていた。

2日目の晩は大平先生に『環境にローインパクトな生活』というテーマの講演を頂き、その後『自然環境と開発』をテーマに、討論が行われた。ここでは日本における不毛なダム建設の

実態や、その利権が生む土建業者と政・官の癒着、また河川環境に対する行政の無策などが話題の中心になった。しかし現実を嘆いてばかりいても、何も始まらない。将来に希望を抱かせる話題もあった。『アメリカは国策として、もうダム開発を止める決定をした。それは“ダムはムダ”という現実を歴史が証明したからである。日本もいずれ、このアメリカ方針に追従することになる。』『霞ヶ浦では自然環境を考えて、コンクリートで固められていた護岸を壊して、葦を植え始めている。』『自然環境を守るためには、まず自分の生活から見直すこと。節電対策、ゴミ対策など、自ら実践できることは山ほど有る。』等などである。

この他、3日目の晩の『多田実：アラスカ、ユーコン川リバーツーリング、スライド上映会』では、有史以来手付かずの大自然の姿に一同大感動。僕と数名の学生は、来年夏、ユーコンに挑戦することを固く誓い合った。また4日目の川遊びで僕が印象的だったのは、今時の大学生は生きた魚の扱いやナイフの使い方に関して、無能に近い者が多いということである。『生きた岩魚を堰き止めた川に放し、それを獲って、自分で捌いて、串刺しにして、焼いて食べる』というプログラムがあったのだが、捌いて内臓を取るどころか、魚にさわれない学生が多かったのには驚いた。しかし、何とか人の手を借りながらも魚が焼き上がると、それを笑顔でほおぼっていたのは言うまでも

ない。

このように毎日新鮮な感動に満ちた4日間を過ごしたのだから、最終日夜のキャンプファイヤーは盛り上がりたはずが無い。大半の学生はテントに入らず、焚き火を前に夜明けまで語り明かしたようである。僕は途中で耐え切れず、眠ってしまったが。

以上がこの講座の概要である。初めての試みで運営に戸惑う場面もあったが、『学生達に環境問題について真剣に考えてもらう』という講座の目的は、ほぼ達せられたものと考えている。

逃げないフクロウ

つい先日比企丘陵のなんでもない林を歩いていたら、大きなフクロウが道端にうずくまっていた。野生のフクロウを間近で見るのは初めてだったので、興奮した。そっと近づいてみた。逃げない。どうやら弱っているらしい。だいたいフクロウは夜行性の動物だから、昼間、こんな人目に付く所をウロウロしているのがどだい変だ。林のすぐ脇は、立派な車道である。どうやら彼も、開発という自然破壊に棲み家を奪われた仲間らしい。更に近づいて手を伸ばしてみると、さすがに逃げ去った。大きな羽をゆっくりはばたいて。

この授業のシラバスにも書いたが、北海道、沙流川、二風谷のアイヌ集落に何故ダムを造らなければならないのか。「計画当初は苫東工業地帯に水を供給するという目的であったが、苫東が消滅し水が不用になったにもかかわ

らず、ゴリ押しで造られた」(野田知佑：雑誌アウトドア，1997.11)。莫大な国家予算をつぎ込み，自然を切り刻む日本の公共事業は，このように本来の目的を見失った例が多い。川を下水道に変えてしまう三面張りは，何の為だ？ 森の木をなくすれば，川は濁り氾濫する。雑木林をなくしたら，熊はどこへ行くんだ？ ワシは，キツツキは，フクロウはどこに棲むんだ？ 今，僕ら一人一人が真剣に考えるべきだ。

自然のことを。将来の自分達の為に。大袈裟に言えば未来の人類の為に。

この講座は最初にも述べたように自ら積極的に始めた訳ではないが，今『環境問題』は僕の大きな勉強のテーマになっている。

(にがりかわ たかし 本学大学教育研究部教授 1997年度総合Bコーディネーター)